

【令和元年度M i e M u の活動と運営全体の内部評価概要】

計画期間（3年）：平成29年度～令和元年度

内部評価結果（概要）

- ・ 展示観覧者数は、基本展示 78,744 人（目標値：65,000 人）、企画展示は 113,137 人（目標値：95,000 人）、合計 191,881 人であり、目標値 160,000 人に対して 120%の達成率となり、目標値を大幅に上回った。観覧者数が目標値の 148.6%を記録した「近藤喜文」展や 99.4%を記録した「三重の仏像」展では、初めて来館したとアンケートに回答した人が 54.7%（近藤喜文展）、42.9%（仏像展）とほぼ半数を占めた。県外からの観覧者を含む初めての観覧者が多かったものの、リピーター率はそれぞれ、45.3%（近藤喜文展）、57.0%（仏像展）を維持することができた。
- ・ 展示観覧者数が開館以来の最大数になったことは、メディアへの情報提供や頻繁な SNS での発信の効果が高かったと言える。特に、近藤喜文展はテレビ会社、仏像展ではゲーム会社や寺院等とのタイアップイベントも開催したことから、多面的なアプローチにより、集客につながったと考えられる。
- ・ 「ともに考え、活動し、成長する博物館」を達成するために、企業連携事業の推進、ミュージアムパートナー活動の深化、ボランティア活動を活性化させるよう運営してきた。参画企業からの M i e M u に対する信頼感が醸成され、連携事業が増加傾向にあるが、館全体の業務量を勘案すると適正規模で実施することができた。ミュージアムパートナーは、参加型調査の活動や館において成果発表・公開することで、外部に魅力を伝えることができ、登録者数の増加につながった。ボランティア活動は、上半期に登録者との対話を持ち、活動内容を再検討し、下半期から 82 回（前年度年 92 回）の活動を行うことができた。年度毎に結果と課題を検討し、対話とともに改善活動をしていく必要がある。
- ・ 資料保存は、定期的に収蔵庫内の清掃・点検を実施し、文化財害虫や保存環境に起因する資料の毀損もなかった。また、館内だけでなく、企画展（仏像展）で借用した資料が県内各地域の大切な文化財であるという認識を地域に伝えることができた。
- ・ 開館以来の課題であった調査研究等の充実については、研究の推進体制や時間配分などの環境整備に取り組んだ結果、学芸ゼミの定期的な開催や参加型調査での参加者確保などが実現できた。学芸員は資料の研究・調査だけでなく、多くの業務を抱えているため、研究に取り組むには、学芸員自身の研究、調査、公開資料準備等の業務マネジメントを行い、円滑に進めることが必要である。引き続き、学芸員の調査・研究を深め、研究内容を共有化し、総合博物館の強みを活かした取組を進めていきたい。
- ・ 学校利用では、市町で実施されている校長会・園長会に出向き（14 回）、学校等による博物館の利用方法について P R したが、利用学校数は平成 30 年度（197 校）より 13%下回って 171 校であった。利用した学校の満足度は高いが、利用数の減少に関する

分析と具体的な対策を検討する必要がある。一方で、学校が主体的に博物館に利用を求めるアウトリーチ活動は、少しずつ増加（H29 年度 12 校→H30 年度 17 校→H31 年度 21 校）していることから、学校での学習活動を理解したうえで、提案することも必要である。

・ 平成 29 年度～令和元年度のM i e M uの活動と運営では、当評価制度を活用した効率的な運営を目指し、業務分担の明確化・円滑化に向け努力してきた。開館時間の短縮、レファレンスカウンター業務の廃止、企画展開催回数の削減と準備態勢の見直し等で、調査研究や資料整理の時間を確保して基幹業務の充実に努めることができた。その一方で、資料の登録公開業務の取組が進まなかった。次期 4 年間の計画で、成果をより運営に活かし、課題が改善できるよう進めていきたい。